

「子ども論」を検討する

岡屋 昭雄

〔抄録〕

子ども論は、教師になる学生を育てる教育学部では重要な課題でもある。いじめ、不登校をはじめ多くの問題が学校現場や家庭で起きている。また小学校においても、授業が成立しない学級があるとの声も仄聞する。その原因として子どもの身体がおかしくなっているとの意見もある。

ところで、「子どもの権利条約」の前文には、「……家族が、社会の基礎的集団として、ならびにそのすべての構成員とくに子どもの成長および福祉のために自然的環境として、その責任を地域社会において十分に果たすことができるように必要な保護および援助が与えられるべきであることを確信し、／子どもが、人格の全面的かつ調和のとれた発達のために、家庭環境の下で、幸福、

愛情および理解のある雰囲気の中で成長すべきであることを認め、／子どもが、十分に社会の中で個人としての生活を送れるようにすべきであり、(以下略)」と、書かれているのである。したがって、大人が真剣に子どもの健全な成長・発達を促す努力を傾注すべき時期にきていることを主張したのである。かつてイギリスの詩人は「子どもこそ大人の父である」と声高に叫んだのである。その国の将来は子どもに懸かっていることだけは確かである。

キーワード・子ども論、深層心理、身体論、透明な存在、成長・発達、自然性

はじめに

神戸連続殺傷事件のA少年が逮捕されて一年が経過した。神戸市内の中学生であった少年は、二年生の一九九七年の二月から三年生に進級した直後の五月末にかけて五人の児童を襲い、うち二人を殺害したのである。神戸新聞社に送付した酒鬼薔薇の「犯行声明」は次のような文章である。

神戸新聞社へ

この前ボクが出ていた時にたまたまテレビがついており、それを見ていたところ、報道人がボクの名を読み違えて「鬼薔薇」（オニバラ）と言っているのを聞いた。

人の名を読み違えるなどこの上なく愚弄な行為である。表の紙に書いた文字は、暗号でも謎掛けでも当て字でもない、嘘偽り無いボクの本命である。ボクが存在した瞬間からその名がついており、やりたいこともちゃんと決まっていた。しかし悲しいことにぼくには国籍がない。今までに自分の名で人から呼ばれたこともない。もしボクが生まれたときからボクのままであれば、わざわざ切断了ら頭部を中学校の正門に放置するなどという行動はとらないであろう。

やろうと思えば誰にも気づかれずにひっそりと殺人を楽しむ事もできたのである。ボクがわざわざ世間の注目を集めたのは、今までも、そしてこれからも透明な存在であり、続けるボクを、せめてあな達の空想の中だけでも実在の人間として認めて頂きたいのである。それと同時に、透明な存在であるボクを造り出した義務教育

と、義務教育を生み出した社会への復讐も忘れてはいない。

だが単に復讐するだけなら、今まで背負っていた重荷を下ろすだけで、何も得ることができない

そこでぼくは、世界でただ一人ボクと同じ透明な存在であるボクの友人に相談してみたのである。すると彼は、「みじめでなく価値ある復讐をしたのであれば、君の趣味でもあり存在理由でもありまた目的でもある殺人を交えて復讐のゲームとして楽しみ、君の趣味を殺人から復讐へと変えていけばいいのですよ、そうすれば得るものも失うものもなく、それ以上でもなければそれ以下でもない君だけの新しい世界を作っていけると思いますよ。」

その言葉につき動かされるようにしてボクは今回の殺人ゲームを開始した。

しかし今となっても何故ボクが殺しが好きなのかは分からない。持つて生まれた自然の性ぶとしか言いようがないのである。殺しをしている時だけは日頃の憎悪から解放され、安らぎを得る事ができる。人の痛みのみが、ボクの痛みを和らげる事ができるのである。

最後に一言

この紙に書いた文でおおよそ理解して頂けたとは思いますが、ボクは自分自身の存在に対して人並み以上の執着心を持っている。よって自分の名が読み違えられたり、自分の存在が汚されることには我慢ならないのである。今現在の警察の動きをうかがうと、どう見ても内心では面倒臭がついているのに、わざとらしくそれを誤魔化しているようにしか思えないのである。ボクの存在をもみ消そうとしてい

るのではないかね。ボクはこのゲームに命をかけている。捕まれば吊されるであろう。だから警察も命をかけるまでは言わないが、もつと怒りと執念を持って僕を追跡したまえ、今後一度でもボクの名を読み違えたり、またしらせさせるような事があれば一週間に三つの野菜を壊します。ボクが子供しか殺せない幼稚な犯罪者と思つたら大間違いである。

——ボクには一人の人間を二度殺す能力が備わっている——

P S 頭部の口に銜えさせた手紙の文字が、雨か何かで滲んで読み取りにくかったようなのでそれと全く同じ内容の手紙を一緒に送ることにしました。

◇

同封されていた「挑戦状」

さあゲームの始まりです

愚鈍な警察諸君

ボクを止めてみたまえ

ボクは殺しが愉快でたまらない

人の死が見たくて見たくてしょうがない

汚い野菜共には死の制裁を

積年の大怨に流血の裁きを

(風車様のマーク) SHOOLL KILLER (綴りはA少年が書いたまま)

学校殺死の酒鬼薔薇

直接に神戸連続児童殺傷事件を扱った著書として、『暗い森——神戸

戸連続児童殺傷事件——』（朝日新聞大阪社会部 一九九八年四月五日）と、『小学生連続殺傷事件 少年 神戸からの報告——』（毎日

新聞社大阪本社編集局 一九九七年九月三十日）の二冊が手許にある。『あとがき』によれば、朝日新聞は、「……取材班は、『なぜ、この

事件が起きたのか、防ぐことはできたのか』『防げたとしたら、どの

時点で、どんな手を打てばよかったのだろうか』と議論を重ね、少

年の内面に一歩でも迫れているだろうか、自問を続けました（傍線

筆者）。少年法の理念をふまえた上で、どこまで事実を踏み込めるの

か、その内容や表現の限界を探る作業にも苦しみました。（以下略）

と、この事件の持つ意味の大きさが示される。また、毎日新聞は、

「……今回の事件報道に対し、多くの批判があった。写真週刊誌は容

疑者の顔写真を掲載し、新聞が捜査段階で流した容疑者像は結果的に

間違っていた。我々の取材、出稿システムに改善の余地がなかったか

どうか。／／そしてもうひとつ。単に事件の経過を報道し、分析するだ

けでいいのかどうか。毎日新聞は今回の事件で、人々の不安を解消出

来るような具体的な提言などを発信するように心がけた（傍線 筆

者）。我々はそれを、阪神大震災で学んだからだが、果たして十分で

あったかどうか。」と、慎重な書きふりをする。

朝日新聞が著書の題目に「暗い森」としたのは、少年の作文「懲

役13年」の最後に書かれていた文言による。それを次に紹介する。

懲役13年

1. 一つの世も…、同じ事の繰り返しである。

止めようのないものはとめられぬし、殺せようのないものは殺せない。

時にはそれが、自分の中に住んでいることもある…

「魔物」である。

仮定された、「脳内革命」の理想郷で、無限に暗くそして深い防臭漂う

心の独房の中…

死霊の如く立ちつくし、虚空を見つめる魔物の目はいったい、

「何」が見えているのであろうか。

俺には、おおよそ予測することすらままならない。

「理解」に苦しまざるをえないのである。

2. 魔物は、俺の心の中から、外部からの攻撃を訴え、危機感を
あおり、

あたかも熟練された人形師が、音楽に合わせて人形に踊りを
させているかのように俺を操る。

それには、かつて自分だったモノの鬼神のごとき「絶対零度
の狂気」を感じさせるのである。

とうてい、反論こそすれ抵抗などできようはずもない。

こうして俺は追いつめられてゆく。「自分の中」に…

しかし、敗北するわけではない。

行き詰まりの打開は方策ではなく、心の改革が根本である。

3. 大多数の人たちは魔物を、心の中と同じように外見も怪物的
だと思いがちであるが、事実は全くそれに反している。

通常、現実の魔物は、本当に普通な「彼」の兄弟や両親たち
以上に普通に見えるし、実際、そのように振る舞う。

彼は、徳そのものが持っている内容以上の徳を持っているか
の如く人に思わせてしまう…

ちょうど、蠟で作ったバラのつばみや、プラスチックで出来
た桃の方が、

実物は不完全な形であつたのに、俺達の目にはより完璧に見
え、

バラのつばみや桃はこういう風でなければならぬと
俺達が思いこんでしまうように。

4. 今まで生きてきた中で、「敵」とはほぼ当たり前の存在のよ
うに思える。

良き敵、悪い敵、愉快な敵、不愉快な敵、破滅させられそう
になった敵。

しかし最近、このような敵はどれもとるに足りぬちつぽけな
存在であることに気づいた。

そして一つの「答え」が俺の脳裏を駆けめぐった。

5. 「人生において、最大の敵とは、自分自身なのである。」
魔物（自分）と闘う者は、その過程で自分自身も魔物になる
ことがないよう、

深淵をのぞき込むとき、

その深淵もこちらを見つめているのである。

「人の世の旅路の半ば、ふと気が付くと、

俺は真つ直ぐな道を見失い、

暗い森（傍線 筆者）に迷い込んでいた。」

ところで、平成十（一九九八）年八月二十七日（木）の新聞には、「須磨の男児殺害両親提訴」の見出しで、「二十六日午後、原告側の井関勇司弁護士は、殺害された男児の父親（四二）のコメントを記者会見で読み上げた。その後、訴訟に踏み切った理由を『事実関係の解決と責任の所在の確認をしたいからです』と説明した。」との記事を読み、この事件の持つ深刻さに愕然としたのである。そして父親は、「…被害者の立場からすると何も終わっていません。本当の意味で一体誰に責任があるのか、誰がどのように責任をとるのかがうやむやになったままです。少年の両親が少年を立ち直らせるといふことは、あくまで少年に対してその成育過程において彼ら自らが行ってきたことに対する償いでしかないのです。（中略）今回は、類希な事件であったため、私達もある程度の事実を知ることができました。しかしながら、それでもこの事件を理解するには不十分でした。この少年がなぜこのような凶悪な犯罪を犯すに至ったか、それに関しての少年の両親の関与はどのようなものであったのかなど、実際にはわかっていないのです。」と、訴えるのである。犯行当時少年は、十四歳であり、自分の行為の責任を認識でき、両親は親権者として犯行の発生を未然に防ぐ注意義務があった、としている。新聞の報ずるところによれば、今年五月、近くの墓地に納骨を済ませたが、祭壇は昔のまま片付けられていない、というのである。この事実は、被害者の家族の深い悲しみは今も終わっていないことを示すものであり、今後とも消えること

はないといつても過言ではない。したがって、このような事件が再び起こらないように社会全体が取り組むべき時期に来ているのではなからうか。単に心の教育ですむべき問題ではないのである。

一．子ども論とは

子ども論といえばアリエス・杉山光信他訳『子供』の誕生（みすず書房 一九八〇年）をあげなければならないであろう。この著書では、子どもは十七世紀以降に生まれた概念である。

村瀬学は、最近の子どもによる事件を解決するためには子ども達を社会に切り結べる力として再評価すべきだ、と次のように述べる。

：戦後五十年の中では、アニメ、ファッションなどの市場に対して、すでに彼らは消費者として登場し、市場の形成力の一翼も担ってきていた。そういう消費市場に影響を及ぼす若い世代のあり方を、社会システムに連動しうる力として現実的に認め、それを「十三歳の力」として新たに評価し直す道も求められている。

しかし戦後の日本の大人たちは、長期にわたって中学生の力を低く見積もり続けてきた。そして中学生自身も自分たちをひたすら「幼い中学生」として演じ続けてきた。しかし、今そういう演出に無理が生じてきているのではないか。彼らに力を認めることは、彼らに権利を与えすぎることになると露骨に警戒された時期もあった。しかし、「十三歳」になっても力を認めないということ、結局責任を負わさない人間を大量につくり出すことになるだけ

ではなかったか。私は「十三歳の力」を、歴史的な大きな視野に立ち、もつと社会と切り結べる力として再評価すべき時代にきている思っている。そういう発想の基盤を、単に家庭教育やナイフの所持品検査のような発想にすり替えてしまわないでいただきたいと願う。

つまり、村瀬は、中学生に責任を負わせ、社会と切り結べる力として再評価すべき時代に来ていることを主張しているのである。したがって、少年法を改正し、処罰を厳しくするのはなく、中学生を人間として尊重する必要性を説くのである。文化人類学でいうようなイニシエーション（通過儀礼）が曖昧になった社会では考慮すべきことではない。生徒手帳で生徒をがんじがらめに縛り付けることなく、生徒を一人の人間として遇する大人の発想の転換が求められるのである。つまり、学校教育が子どもを困い込ませてしまいが故に子どもの自主性や創造性の芽を摘んでしまう、ということになる。ミヒヤエル・エンデは『モモ』の作品を通して、学校を子どもの遊びから切り離し早く大人にする工場のように捉えている。つまり、刑務所のような感じである。確かに、子どもが学校に通うことは文化遺産を継承し、未来の社会形成者としての役割を担っていたことは確かである。しかも、ユングもいうように「発達」と「可能性」を子どもが担っている、というのである。したがって、子どもは、地域社会の行事に参加したり、異学年集団で行動したりしつつ子どもなりの規律を学ぶ機会があったのである。ぱっちゃん、ペーゴマ遊び、竹馬、凧揚げ、羽子板、カルタ、かくれんぼ、鬼ごっこ等々、に夢中になって家に帰るのが遅くなるの

もしばしばであった。低学年の子どもは、上学年のリーダーの命令には従わなければならなかった。リーダーは集団の秩序を守るためには厳しかった。しかし、低学年の面倒もよく見てくれた。喧嘩もよくしたが、刃物を使ったり、棒を振り回して叩いたり、石を投げつける、あるいは一人の子どもを多数で虐めるといった行為は卑怯であり、タブーとされていた。村瀬が主張する『十三歳の力』を、歴史的な大きな視野に立ち、もつと社会と切り結べる力として再評価すべき時代に来ていると思っている。ことを可能にしようとすれば、学校や塾に困い込むことを止めなければならない。もつといえ、学力偏重の今の学校教育を変えて行く以外には考えられない。学力が総てという信仰から自由になることである。それぞれの子どもが自由に自分の個性が生かせるような教育が求められるのである。

村瀬が論壇に投稿した翌日、二月二十五日(木)の論壇には、大学生の飯田 雅は、「感情と向き合って生きよう」と題して、若者が自分の感情に向き合っていないことを問題として次のように述べる。

：「キレる」という言葉が一躍有名になった。若い世代で一般的に使われるこの言葉は、感情に対する姿勢が一定の方向へ向かっていることを示唆している。大学三年生の私は、この言葉を多用しはじめた最初の世代に属している。その私でも、一連の事件に見られるような「キレ方」には、疑問を感じてしまう。

「キレた」先には何があるのか。彼らは「キレた」瞬間、自分自身の感情をもちや自分に帰属させない。肝心なのは狂気と化した自分がいるというだけで、そこには理由も理屈もない。「キレた」後

は、言動に関して一切の責任は自分自身にないのである。規律、規範、倫理、信念……。そういうものの中で生き、つながっていた自分が何かの拍子でそこから外れる。その拍子というのが「キレる」ことである。そういうニュアンスが「キレる」を常用語とする若者の間で認識されている。

私たち若い世代の間で最近よく耳にする言葉は、このようなニュアンスを含んだものが特に多い気がする。例えば酔っ払った者に対しては「コワレタ」、目つきで何らかの激しい感情を表している者に対しては「(目が) イッテル」などである。これらの「コワレタ」、「イッテル」は「キレる」と同様、その先に理性の働かない狂気の闇(やみ)を暗示させる言葉である。

人間だれもが持つ喜怒哀楽のような感情そのものに対する関心がなくなってしまうのか。「言葉」を探っていくとそんな感じが否めない。感情の微妙な差異を表す豊かな日本語が消え、狂気への扉を開く表現ばかりが氾濫している。(以下略)⁽¹⁾

つまり、今の若者たちが自分の感情に向き合っていないことが問題なのである。「キレた」者よりも、「キレさせた」周りが悪い、このような責任転嫁が若者の心に潜んでいるのであろうか。いや大人も同様であるのではないのか。

われわれ大人は子どもの「ムカツク」から「キレる」という子どもの行動に対処できる展望がないことである。ある中学校の教師は、「日頃生徒との関係のよくない先生が、生徒を指導しようとするとき、反発して暴れる子どもが出てくる。要するにキレるわけである。

他の教師が仲裁に入っても首をつかむは、足を蹴るわで收拾がつかなくなる。そのようなとき、生徒の震えが止まって落ち着くまで生徒を抱きしめるというのである。長いときは三十分、時には一時間半くらい抱きしめていたのであり、最初は「うるせえ」「てめえ」「ぶっ殺す」「お前は生徒の気持ち全然分かってない」と叫び、腹や背中などを殴りつけてくる。生徒もやがて落ち着いてくると、少しずつ自分の気持ちを話し出す。今の生徒の挫折感極限状況にあるといってもいい。部活にも疲れ、勉強にも集中できない。生徒のストレスがたまっている状況があり、生徒の自己評価が低い生徒が多くなってきている。教師にも魅力が感じることが出来ない。悩みをうち明ける友達がいらない、と嘆く中学生が年々増加する傾向にある。」ともいわれている。また、子どもたちが「キレタ」時に、「ガマン、ガマン」とか、「ここで怒ったらだめだ」との内面への語りかけることの必要なことを子どもに理解させることである。

宮台真司は、「仲間以外はみな風景」の題目で次のように述べる。

ところが昨今の若者たちは街で「旅」をしている。そこでは仲間以外の他者はただの風景にすぎない。教室の中も同じこと。幼稚園から高校、大学にいたるまで、教室の中は二、四人の小グループに細分化している。教師が「仲間だから仲良くしよう」と言っても、もはやトートロジーを超えることがない。生徒は「仲間じゃないから仲良くしないよ」と思いながら黙っているだけだ。⁽²⁾

つまり、「仲間以外はみな風景」の感覚は子どもたちから世間というパラダイムが喪失したことを意味する。つまり、学級全体の生活規

範・行動規範が出来にくい状況が生まれていることである。電車やバスの中で大声で喋る若者が多くなっている。（いや大人だって大声で他人の迷惑などはお構いなしに喋っている者が多くなっている。）時として、こちらが恥ずかしくなる話しの内容でも平気でしている場面にしばしば出くわすことがある。これも自分の仲間以外はモノとして、つまり風景としてしか見ていないことになる。したがって、社会的な規範の喪失現象と捉えることも可能であろう。隣近所で挨拶をしなくなった。道を歩くのにも右左を自分勝手に歩き、他人の足を踏んでも「ご免なさい」ということは自分の非を認めることになり、そのようなことはできない。あるいは、自動車事故で「ご免なさい」といったが故に賠償金を払う羽目に陥ったと嘆く声もあるということにも重なるのである。

二、子どもという現象

最近、子ども論の著書が多く出されている。つまり、子どもの問題がマスコミを賑わせているからである。その原因として犯罪を犯す子どもが多くなつたこともあるだろう。あるいは青少年犯罪の低年齢化現象、虐めによる自殺も多くなっている。また中学生による教師の殺傷事件も起きている。平気で人間の命を奪うといった事件に暗然とさせられることもある。

最近の子ども論は少し過熱気味であるような気がする。こんなに「子ども論」が盛んに取り上げられるのは、子どもに現代の暗さの総

てが典型化されているようにも把握できる。フィリップ・アリエスは、「子ども」とか「子ども時代」という概念は近代社会の所産であるというのである。フランスを中心とするヨーロッパ社会という限定付きではあるが、子どもというのは十七、十八世紀以降に確立した近代的な概念であることを論証して見せてくれる。それをそのまま日本に当てはめてもいいものであるうか、と疑問になるわけである。小浜逸郎は、『方法としての子ども』（大和書房 一九八七年七月）において、柄谷行人の『日本近代文学の起源』（講談社 一九九六年六月）を批判して、次のように述べる。

柄谷行人は、児童文学者たちが持ち出す「真の子ども」という概念をとりあげて、かれらは、子どもという概念そのものが近年になつて発見されたに過ぎないという歴史的事情をみようとしないうとして、次のように批判する。

児童が意識的に存在していることは誰にとつても自明のようにみえる。しかし、われわれがみているような「児童」はごく近年に発見され形成されたものでしかない。たとえば、われわれにとつて風景は眼前に疑いなく存在する。しかし、それが「風景」として見出されたのは、明治三十年代に、それまでの外界を拒絶するような「内面性」をもつた文学者によつてである。それ以後、「風景」はあたかも客観的に実在し、それを写すことがリアリズムであるかのようにみなされる。あるいは、ひとはさらに「真の風景」をとらえようとする。しかし、そのような「風景」

はかつて存在しなかったものであり、それは一つの転倒のなかで発見されたのである。

まったく同じことが「児童」についてもいえる。「児童」とは一つの「風景」なのだ。それははじめからそうだったし、現在もそうである。したがって、小川未明のようなロマンは文学者によつて「児童」が見出されたことは奇異でも不当でもない。むしろ最も倒錯しているのは「真の子ども」などという観念なのである。^(四)

小浜は、柄谷の論が、アリエスの『子供』の誕生（みすず書房）を最も重要な典拠にしていることに向けられる。アリエスの本は、十七世紀以前にはヨーロッパには私たちが現在意識し、問題にするような、子どもは存在せず、現実の子どもはみな小さな大人として扱われたという事実を示したものである。子どもたちが近代的な家族生活や学校という制度によつて大人社会から隔離された、それ自体の存在として扱われるようになってはじめて、現在わたしたちが手にしているような「子ども」という観念が成立したものである。したがって、小浜は、「柄谷は、鋭利な知性の快楽とでも呼びたいような一種放恣な論調によつて、さながら次のように言い切っているみたいである。

——諸君が深刻になつて問題にしている（子ども）の問題などは、本当はない。なぜならば、大人と子どもという区別はそれ自体が、ただか百年か二百年の間に仕組まれた近代システムによる制度的虚構だからだ、その制度性を認識しさえすれば、この問題は片づいてしまふ……。」^(五)と批判しつつ、「この本での柄谷の論述を支えているパト

スが、そうした制度的虚構のからくりを見破つて、その虚構性に気づかない者たちの（倒錯）性を指摘してみせることだけにほとんど向けられているのは確かであり、それ以上に何も進んでいないのである。^(六)と述べ、子どもについて具体的に踏み込んで論究することがないことを批判する。さらには、「この本で柄谷が槍玉にあげている猪熊葉子の、小川未明についての記述は、引用部分だけでも仔細に読めば、必ずしも柄谷が批判しているような意味で、『真の子ども』の存在を楽天的に信じているのではないことがわかる。猪熊はここで『現実の子ども』という概念と『真の子ども』という概念を混用している。」^(七)とも述べる。

本田和子^{マキ}は、「個体史のなかの『子ども』」に次のように述べる。

「子ども」が発見されたことで、人は成長するものとなった。非大人として範疇化された子どもが、大人へと進む過程が、「成長」として把握されたのである。「子ども」の発見が「大人」の発見であり、それは同時に「成長」の発見でもあったのだ。

人が成長する、とは、個体が時間を抱え込み、そのゆえに歴史を持つということでもある。「子ども」の存在において人は個体史を生きる存在と化した。個体史という、一人々々に固有の時間が、人の身体に抱え込まれたとき、その個体の主管者として「自己」というシステムが出現した。「自己」という閉じられた統合体の誕生……

子どもという外部の促しによつて、人が「自己」というシステムで己を閉じたとき、一方では、その子どもを再び内部に抱え込むべ

く、新たな運動が開始されていく。いわゆる「内なる子ども」の発見がそれである。非大人としてのよう少年者を、「子ども」という差異項の結節化させた近代が、「内なる子ども」に熱いまなざしを注ぎ、それを自身に見出そうと、内部に錘を下ろすことを試み始めたのは、このことを証している。一九世紀ヨーロッパ・ロマン派の文学において、自伝文学や童心に題材を求めるものが見られるのも、この例と言い得よう。

我が国の場合、小川未明ら童心主義者によって、「子ども」が発見されたとする見解がある。ただし、柄谷行人の言を借りれば、それは、「内的な転倒によって見出された『児童』に他ならない。確かに、未明が作品中に描き出した子どもは、日常的に外在する現実態としてのそれではなく自身の内的世界から探り出された、「内なる子ども」の言語化であった。そして、それは、柄谷の指摘のように「内部を持った子ども」しかも、それは大人の「内面において」見出される……」

つまり、本田の「子どもが発見されたことで、人は成長するものとなった。」と述べることは重要である。そして、「人が成長する」とは、個体が時間を抱え込み、そのゆえに歴史を持つということでもある。『子ども』の存在においては、人は、個体史を生きる存在と化した。』とは、まさに一人の人間の発見であるが故に、この世界において掛け替えない存在として位置づけられたことになる。つまり、一人ひとりの子どもは、この世界において唯一絶対の存在であり、意味・価値ある存在なのである。したがって、小さな大人でもなく、幼

稚な存在でもなく、人間として認められたことにもなる。

柄谷は、「……小川未明における児童は、『現実の子ども』からみると、ある転倒した観念にすぎないといわれている。未明における『児童』がある内的な転倒によって見出されたことは確かであるが、しかし、実は『児童』なるものはそのように見出されたのであって、『現実の子ども』や『真の子ども』なるものはそのあとで見出されたにすぎないのである。したがって、『真の子ども』というような観点から未明における『児童』の転倒性を批判することは、この転倒の性質を明らかにするどころか、いっそうそれをおおいかくすことにしかならない。」と述べて、小川未明の子どもの発見の正当性を主張するのである。そして、「児童が客観的に存在していることは誰にとつても自明のようにみえる。しかし、われわれがみているような『児童』はごく近年に発見され形成されたものでしかない。たとえば、われわれにとつて風景は眼前に疑いなく存在する。しかし、それが『風景』として見出されたのは、明治二十年代に、それまでの外界を拒絶するような『内面性』をもった文学者によってである。」と述べて、児童がごく近年に発見され形成されたものではないかというのである。目黒強は、次のように柄谷行人の文章を紹介して批判する。

日本の児童雑誌は、明治二十年代に、そのような学校教育の補助として、あるいは「学童」のために出現している。その内容を批判するまえに、学制がすでに新たな「人間」あるいは「児童」をつくり出していたことに注意すべきである。（百八十五頁）

但し、柄谷論文は、『こがね丸』を問題にしつつも、ほぼ同時期

の『当世書生氣質』『暑中休暇』に言及していない点は不十分であった。柄谷論文は「真の子ども」が転倒である文脈で議論されることが多いが、それは「転倒の転倒」に過ぎず、まずは「児童」こそが転倒であったのだ。議論さるべきは、「学童」もしくは「立身出世」ではなく、「児童——であること」が孕む問題群に他ならない。だからこそ、「児童」が「あるいは」と「人間」に接続されているのである。(この「人間」は「先験的Ⅱ経験的Ⅱ二重体」

「フーコー」である。)学童／児童の問題構成を見ない議論は、ネーション・ステイトにおける体制と諸個人の権力関係を抑圧史観として、一枚岩的に捉えてしまう危険性があるのではないか。

つまり、目黒が述べるように、「柄谷論文は『真の子ども』が転倒である文脈で議論れることが多いが、それは『転倒の転倒』に過ぎず、まずは『児童』こそが転倒であったのだ。議論さるべきは、『学童』もしくは『立身出世』ではなく、『児童——であること』が孕む問題群に他ならない。」という捉え方は重要である。つまり、子どもあるいは児童であることが孕む問題群を組上にのせなければならぬことになる。しがって、柄谷は、児童の発見は、小川未明に決定する根拠について以下のように述べる。

一九二六年、小説と童話をかき分ける苦しみを解消し、以後童話に専心することを宣言してから、未明の作品の世界は大きく変化した。かつての未明童話の特徴づけていた空想世界は徐々に姿を消し、代わって現実的な児童像が描かれ始めた。それとともに、未明の作品には濃厚な教訓臭が感じられるようになった。(中略)

……いよいよ子どもを対象として作品を書く決意をした時、未明は現実の子どもと向き合わざるを得なかった。そして未明は子どもたちが環境と調和して生きられるように「忠告」する必要があるようになる。なぜなら、現実の子どもも目を前にすれば、未明の観念のなかにあった子どものように「無知」「感覚」「柔軟」「真率」な子どもは存在しないことに気づかないわけにはいかなかったからである。

つまり、小川未明は、現実の子どもと向き合わざるを得なかった、というのであり、そして未明は子どもたちが環境と調和して生きられるように「忠告」する必要があるようになる、ともいうのである。

筆者は、今後、児童文学における児童の発見についてはさらに慎重なる検討と緻密に探究する必要性があることを述べておきたい。

ところで、教育にとつて子どもをどう捉えるのか、を考慮に入れれば、ルソーの『エミール』をすぐに思い浮かべるであろう。「自然に帰れ」に象徴される如く、エミールの思春期までの成長のプロセスに即して語られる。我々は自然が教えてくれるものが多いことに気づかされる。つまり、子どもをどう把握するのか、が教育の方法を決定する根本命題でもある。今後の時代に即した新しい子どもを捉える「知」のパラダイムこそが早急に求められなければならないのである。現代の子どもは、自己の意志において現在の自己を乗り越え、多様な新たな自己へと常に自己を超越していく存在(超人 Übermensch)であることをニーチェは主張し、現在の自己を乗り越え、自己超克、自己形成するためには、世界に開かれて生まれてくる子どもにとつて

向かい合う「世界」との関係こそ決定的であり、それとの統一において、はじめて新たな個性的な自己があらわになってくるものであることをポルトマンは主張する。さらには、マルティン・ブーバー（一八七八—一九六五）は、抽象的主観的な〈われ〉とはあくまで〈われ——なんじ〉、〈われ——それ〉の対応関係のなかでのみ現れ出てくるものであるとする人間観に立脚する。そして次のようにブーバーは述べる。

〈われ〉はそれ自体では存在しない。根源語〈われ——なんじ〉の〈われ〉と、根源語〈われ——それ〉の〈われ〉があるだけである。^{〔十三〕}

つまり、(cogito ergo sum)「我思う故に我あり」とデカルトのいう〈われ〉をブーバーは、〈われ——なんじ〉と〈われ——それ〉の対応関係で見ているのである。したがって、ブーバーは、人間とは生まれながらに関係を結ぼうとする存在であり、関係を通してしか自己実現できないことを強調するのである。つまり、人間を「相互応答的・関係の実存」として捉えているのである。さらには、関係の領域は三つある、というのである。「自然」「人間」「精神的存在」である。これらの領域との対応の仕方によって、〈われ——なんじ〉と〈われ——それ〉関係で関わるかによってわれわれ人間世界は二つになるのである。つまり、〈われ——なんじ〉の関係で関われば、その関係は直接的であるが、〈われ——それ〉の関係であれば、自然、人間、精神的存在を向かい合う存在としてではなく、〈われ〉のの対象として捉え、それらを経験して利用しようとする。こうした関係で

は、現在は生き生きとした現在とはなり得ず、過去にのみ生きていることになり、このことは近代理性主義の世界そのものである、というのである。したがって、ブーバーは、〈われ——なんじ〉の人格的、対話的關係を人間のなかに、あるいは国家や社会に構築することによって人間を再構築しようと企てるのである。

三 子ども論の未来に向けて

宮田登は、比喩的に子どものある方について次のように述べる。

子どもが大地を裸足でとびまわることのできた時代はすっかり遠のいてしまった。地面に直接触れることは、いわば大地の精霊の力をストレートに身体のかなかに浸み通らせることを可能にすることにはかならない。日本の代表的な民俗芸能のなかに反閑（はんかん）とよばれる作法がある。いろいろ理屈をつけると難しいが、これは大地を裸足で踏みしめて呪文を唱えつつ、千鳥足でわざわざとよろけながら歩いてみせるパフォーマンスなのである。単に地面を踏みしめるというだけではなく、特別な踏み方によって邪悪なものを追放できるといふ古代的信仰にもとづいている。^{〔十四〕}

つまり、宮田は、子どもたちが裸足で大地に触れることをしなくなつたことは、「いわば大地の精霊の力をストレートに身体のかなかに浸み通らせることを可能にすることにはかならない。」とまで言い切っていることが不可能なことを示しているのである。つまり、子どもたちの精神的世界のみならず、自然や神や仏の世界から遠のいている、と

いうのである。そして、宮田は、「このような伝承遊びは急速に失われつつあるが、子供であるかぎり積極的に大地と触れ合うことが必要だとする信仰は大昔からあった。このような人間と自然との交流を媒体するのが子供であるという位置づけは、今後も伝承されていくべきものである。」と結論づけるのである。子どもが大地と積極的に触れ合えるような環境を取り戻すことが必要であることを強調するのである。さらに、宮田は、次のような貴重な意見を述べる。

子供たちは、縁側から庭そして広場へと、遊びの空間を広げていくのが普通だった。いわゆる野外遊びのなかで、草木虫魚との交わりは意義深いものだった。草木虫魚には生命があり、とくに小動物の動作は、子供たちにとって神秘的とすら思われた。(中略)／祖父母と孫と一緒に住むという機会は多く、子供は老人からさまざまなお知恵を授けられた。夜一緒に寝ると、昔話や童歌、早口言葉などの言葉遊びを教えてくれた。田畑の仕事は乳母が中心だったから、祖父母は山仕事に行くことが多く、一緒に山にもつれていってくれた。そして、谷川や山道で出会った虫や小動物、草木や花のことなどを教えてくれるのであった。とくに大切なのは、人は動植物と一緒に暮らしていくのがよいこと、動物は人と同じような気持ちをもっており、いろいろな知恵を子供に伝えてくれること、つまり自然を大切に生きていくことのありがたさを、子供のころに老人たちから学ぶことができたということである。老人は子供のようになるというが、おじいさんの生まれかわりが孫になるという考えも、祖父母と孫との深いきずなを示すものである。^{十六}

つまり、ここで宮田が主張するのは、老人と子どもとの関係が衰弱している現状をどのように回復したらいいのか、にかかわって重要な指摘である。したがって、自然とのつきあい方、小動物も人間と同じような気持ちをもっていること、さらには、昔話や童歌、早口言葉などの言葉遊びを教えられていたというのである。単に自然のつきあい方の問題ではなく、あるいは、人間中心の思想に毒されるのでもなく、自然と共存する思想を自然に人間の身体に浸透させてくれ、人間としての精神世界を充実させてくれるのであるが故に、真実の意味での「人間としてのやさしさ」が身につくことは当然である。芹沢俊介も次のように大人の子ども批判への反論を展開する。

一つは、こういう口をきくおとなはほとんどすべて、自分の子どもだけは別だと考えいる点です。

二つ目は、非難の対象としての子供の行動や感性や情緒の形成に先行する世代として自分もまた関与し、貢献してきたという反省が脱落している点です。

三つ目は、今の子供と自分とはまるで違う生活環境、時代精神のなかで育ったという点を無視している点です。^{十七}つまり、以上の三点は、子ども論の核心に据えて考慮すべき問題である。つまり、大人対子どもという狭い枠組みで捉えるのではなく、人間的な観点を通して論究すべきであろう。したがって、大人からの眼差しで子どもを見てはならないことである。芹沢は、子ども論にイノセンスという概念を持ち込んで子どもを分析する。芹沢はイノセンスを次のように規定する。

生命、身体、性、親、家族、人間に対して、それらすべては他から贈られたもので、自分で望んだものではないというものです。つまり、根元的受動性、という考え方です。

イノセンスには二つの側面が見られます。ダイナミックな面とスタティックな面とです。ダイナミックな面とは子どもの荒々しさとか野性的な面、そういう面を子供は小さい時から見せます。スタティックな側面が市松人形を捉える観点のような気がします。（中略）イノセンスは根元的受動性ですからその内面は、無という空虚です。この空虚な内面を有償的に埋めていく行動が子供のとする行動です。^{（下△）}

つまり、現在では、子どもが本来持っているイノセンスを抹殺するような状況があり、調教されていない子どものイノセンスを回復することを真剣に考えなければならぬと主張する。芹沢は、遊びの意味について次のように述べる。

一般的には、遊びは日常性の中の非日常という構造を持っているんですけど、でも遊びのルールというのはどこか大人の世界のルールを模倣しているところがあるわけです。つまりおとなの世界へ適応していくためのひとつのトレーニングになるんだということとは確実にいえるわけです。でも同時に、しつこく繰り返しますけれど、遊びは日常性の枠の外に出たいという無意識の衝動をかならず内在している。^{（下△）}

つまり、芹沢が述べる如く、例えば、かくれんぼの面白さは、鬼は、できるだけ長い時間、他のみんなが家に帰ってしまったても、もう誰も

いないかもしれないという孤独な不安な状況に置くことにより、現実の世界から異世界を見るような恐ろしさを感じさせることが必要である、というのである。このような遊びを失ったということは、子どもの生活が単調になったということのみならず精神的な豊かさを失ってしまったことにもなるのである。斎藤 孝は身体論の立場から次のように述べる。

腰やはらは、じっくり考える心身の構えであり、合理的思考や冷静な判断と矛盾しない。勝海舟は、合理的思考に優れた人だが、彼の『水川清話』には人間の器や腹の話が満ちている。腰や腹は、意志と感覚と経験が練り合わされる場所であり、日本的な成熟の型だった

「ムカツク」という言葉の隆盛は、腰腹文化の衰退と深く関係している。今時「キレる」のは頭で、堪忍袋の緒ではない。堪忍袋のある腹の評価そのものが低くなったのだ。腹で深く呼吸しない浅い息の身体から、「ムカツク」はあぶくのように吐き出される。^{（上△）}

つまり、身体的にも人間の身体がおかしくなってきた一つの原因であろうか。言葉と身体の問題だけに限定することなく、生き方に関わる問題として深めるべきであろう。

小浜逸郎は、本田和子の『異文化としての子ども』を取り上げ、「本田は、子どもを、文化や秩序の作り手である大人たちにとって『外なる者たち』と考え、子どもが示す『不気味さ』や『わけのわからなさ』を『異文化』として率直に認めるところから出発して、その『異文化』性を人類学的に読み解こうという方法を提示する。」^{（下△）}と述

べつつ、次のようにこの著書の批判をする。

本田は、文化人類学的方法を、私たち自身の社会の子どもという対象にさしむけることの妥当性を深く反省していないようである。

(中略)

もうひとつは、もともと決定的に異質なものに、こちら側の方法によって解釈を与えようというのであるから、やはりともすれば、

より深い理解に至りつく前に、意味づけ作用が上すべりして、一種の解釈のための知的な軸を固定させてしまい、何でもかんでもその

軸でその社会や文化の組立を再構成してみせようという野望のとりこになつてしまふ。^(二十七)と基本的な研究姿勢そのものを批判する。そ

して「本田のあやまりは、初めから子どもを、未開人と同様に『文化の外にある者』と決めつけてしまつてしまつてゐる点である。」^(二十八)とまでい

である。「子どもは少しも『文化の外にある者』や『秩序から無視されてゐるもの』などではない。時にはその開かれた感受性によつて文化の先端に位置する存在であり、また、すでに述べたように、総じてかれらは生まれたときから大人との関係において秩序性の方向に強力に組みこまれてゐる。しかしもつと重要なことは、何よりもかれら

が、未開人とちがつて、もつと私たちに身近な、方法的に了解可能な存在だということである。」^(二十九)と小浜は述べつつ、子ども研究が子どもが

生きている場所や子どもの実体から出発すべきだ、と主張する。本田の著書の目次からも分明の如く「べとべと」「ばらばら」「わく

わくする」「ひめやかな」「もじゃもじゃ」「ひらひら」という語彙を駆使しながら子ども論を展開する方法も一つの方向である、と考へる

のであるが、いかがなものであろうか。本田和子の『子どもという主題』(大和書房 一九八七年四月)の内容に見られる児童文学に登場する子ども論に興味はあるものの、それを現実の子ども論に当てはめることの危険性を感じるのである。

つまり、現実には生きている子どもとの研究が重要であることは今さらいうまでもないであろう。

おわりに

今回は、子ども論の著書の中核に据えて論究することに専念した。したがつて、筆者の子どもに対する考えを提起することはできる限り控えたつもりである。子ども論が取り上げられる時は、大人それ自身が行き詰まつた時である、ともいわれている。それ故に子ども自身は人間それ自身の問題でもあることを考慮しなければならないのであることを述べてこの論稿を終へる。

注

(一) 平成十(一九九八)年二月二十四日の朝日新聞「論壇」に掲載されたもの。同志社女子大学助教授 児童文化論との肩書きもある。

(二) 平成十(一九九八)年二月二十五日(木)の朝日新聞「論壇」に掲載される。横浜にあるフェリス女学院の大学生である。

(三) 宮台真司『まぼろしの郊外 成熟社会を生きたる若者たちの行方』(朝

- 日新聞社 一九九七年十二月) 百三十一頁 「郊外化と近代の成熟」の章に書かれている。宮台は第一の郊外化⇨団地化: 「地域の崩壊」と「家族の内閉」、第二段階の郊外化⇨コンビニ化: 「ケイコさんのいなり寿司」をあげる。テレビのコマーシャルのタイトルの「ケイコさんのいなり寿司」というのは、以前なら隣近所や家族の目があつて出来なかつた夜中にいなり寿司を買いに行くことが八十年代半ばから自然の行動になったというのである。
- (四) 小浜逸郎 『方法としての子ども』 (大和書房 一九八七年七月) 七八~七十九頁
- (五) 前掲書 八十頁
- (六) 前掲書 八十頁
- (七) 前掲書 八十一頁
- (八) 加藤尚武・西脇与作・永沢哲・本田和子・杉山光信・森下みさ子 『子ども』 (岩波書店 一九九一年一月) 二八八~二八八五頁
- (九) 柄谷行人 『日本近代文学の起源』 (講談社 一九九六年五月) 百五十七頁
- (十) 前掲書 百五十七頁
- (十一) 日黒 強 「明治二十五年における学童 / 児童の言語編成 - 巖谷小波『当世書生氣質』と『暑中休暇』における同一性と差異 -」 『児童文学研究 第三十号』 (日本児童文学学会 一九九七年十一月) 二十四頁
- (十二) 柄谷行人 『日本近代文学の起源』 (講談社 一九九六年五月) 百五十五~百五十六頁
- (十三) マルティン・ブーバー著・植田重雄訳 『我と汝・対話』 (岩波書店 一九七九年) 二十二頁
- (十四) 宮田 登 『老人と子供の民俗学』 (白水社 一九九六年三月) 百二十一頁 「八 大地に触れる」の題目で書かれる。他にはネッキ (念木) を紹介し、念ずるつまり願うという意味があつたと考えられている、と述べる。
- (十五) 前掲書 百二十四頁
- (十六) 前掲書 百六十二~百六十三頁
- (十七) 芹沢俊介 『他界と遊ぶ子供たち』 (青弓社 一九九一年八月) 七頁
- (十八) 前掲書 三十六頁
- (十九) 前掲書 百十七頁 「II 他界と遊ぶ子供たち」の章の(かくれんぼの向こう側)に書かれたものである。
- (二十) 『ムカツク』 隆盛の今 『腰・ハラ文化の復権を』と題して一九九八年十月五日(月)の朝日新聞夕刊の文化欄に掲載されたもの
- (二十一) 小浜逸郎 『方法としての子ども』 (大和書房 一九八七年七月) 六十六頁
- (二十二) 前掲書 六十八~六十九頁
- (二十三) 前掲書 七十頁
- (二十四) 前掲書 七十頁
- (おかや あきお 教育学科) (一九九八年十月十四日受理)